銀賞

『土産』

『土産』

石川県　金沢大学附属高等学校一年　**青野有佳**

「2013年に、32回目の夏季オリンピックの開催が決まった場所はどこだ？」「日本の東京です」「そうだ。2020年の32回目のオリンピックは東京で行われるはずだった。しかし、それは一年後の2021年に延期になった。理由は？」「新型ウイルスが世界的に流行し、人々が一か所に集まることは、感染のリスクを高めるため危険とされていたからです」「では、本当に2020年にオリンピックを開かなかったのは、正しい判断だったのか？」「はい、正しいです。なぜなら……」『授業を終了してください』「よし、今日の新古代の授業はここまでだな、明日は新型ウイルスに対して、各国が行った対策や、経済に与えた影響について学ぶぞ。給食はもうすぐ来るし、自分で配膳して食べてくれ。じゃあまた五限目の授業でな」

　この教室には少女一人だけ。「五限目は古代数学か」はぁとため息をつきながら、少女はまるでコンタクトを外すように眼球に触れると、レンズを取った。

「まるで魔法よね」

　少女がレンズを外したことで、少女の視界からは、教科書、資料集、教員が書いた文字、教員すらも消えた。レンズを外して見えるのは手垢一つない白色の壁、に映し出される使いこまれた教室の映像。それは違和感なく部屋全体に映し出され、教室にふさわしい部屋としてそこに存在している。蝉の声も、白く映える制服も、充満する蒸し暑さもそこにはない。

『ランチが配達されました』

少女が勢いよく立ち上がっても、滑らかな床に椅子の音が響くこともない。地下まで続く階段を、少女は駆けてゆく。「あ、こんにちは」地下に来ても光は失われず、煌々と照らされる階段の中で清掃をする職員を見かけた。「こんにちは。ランチを取りに行くのかい?」「そうです」「えらいね」いつも変わらない抑揚と表情。

この職員は、毎日決まった時間に決まった場所を掃除する。階段を降りた真正面に、柔らかなクリーム色の自動ドアがあって、ドアの前には一台の配達員が立っている。

「こんにちは。配達に参りました。お名前と生年月日を申し上げて」「ハル・アカサカ。3004年8月31日生まれ」「ご本人ですね。確認しました」傷一つない、滑らかな箱を手渡される。「落とさないようにしてください」「わかりました」配達員は、歩幅一つ乱さずにドアをくぐって去って行った。少女は踵を返し、階段を上り始める。一段ずつ上るたびに、息は切れ始めるが、暑さは感じない。「やっと着いたわ」少女は教室に戻ると、一つしかない椅子に腰かけ、一つしかない机に箱を置いた。

ふたを開けると、四角い正方形の中に、主食、副菜などがバランスよく仕切られて乗っているランチが入っている。ただし、見た目はどれも豆腐のように、四角く固められた白い固形物である。しかし少女は、嫌がるそぶりも見せず平然と取り出し、フォークを刺して食べ始めた。「今日はスパゲッティか。あ、サラダはトマトが入ってるのね」これが食事である。ひとたび口に入れてしまえば、味覚が触感や味から、料理として認識する。少女は食事を終えると、食器を箱にしまって教室の外に置いた。教室の壁に寄りかかって、腕時計の両側を軽く押す。様々なアイコンが表示された色鮮やかな画面が、ジジ、と浮かび上がる。少女は、画面に映る小説を読み始めた。少女が画面に触れずとも視線を感知して、ひとりでにページはめくられていく。ただ目線だけを動かし

て、少女は黙々と本を読んだ。『五限目開始5分前となりました』少女は渋々、電源を切った。自分の席に戻り、机から「古代数学」と書かれた小さなケースを取り出す。ふたを開けるとそこには、先ほどと同じように小さなレンズが入っていて、少女が、まぶたを指で大きく開き、レンズを入れる。少女が三回ほど瞬きをする間に、視界に教科書、資料集、教員が現れた。

「授業の前に、話がある」教員は少女に目線を合わせる。「修学旅行の話なんだが、この授業が終わった後、画面に移動するから、レンズは外さないでくれ」「わかりました」「たしか一か月後だな。ルールを守って楽しんできてくれ。時間だ、始めるぞ」修学旅行。千年以上前にもあった、学生が学区から遠いところに行ってさまざまな事を学ぶ旅行。ただしそれも千年前の話だ。『時間です。授業を終了してください』「じゃあ今日はここまで」「今日もありがとうございました」「じゃあ画面に移行する。三回瞬きをしてくれ」少女が、ぱちぱちぱちと三回まぶたを動かすと、画面が切り替わった。

『こんにちは。お住いのエリアと生年月日、氏名を入力してください。入力した情報は情報管理局が保管します。入力した情報を保存します。保存が完了しました。行きたい時代はございますか』昔と今の修学旅行の最大の違いは、過去に行くこと。好きな時代に行くことができる。平安時代で貴族と共に和歌を詠んだ人。新中世で地球が人類を追い出すのを観察した人、AIと呼ばれる機械と人間同士の第三次技術大戦を体験しに行った人などがいる。「特に」『了解しました。それではランダムに選択します』少女が一度だけまぶたを上下に動かすと、画面が切り替わった。画面には四桁分のスロットが凄まじい速さで回転している。『お好きなタイミングで表示されているスロットに、四桁目から一つずつ触れてください』少女は躊躇せず、四桁目から表示されたスロットに人差し指で触れた。「2、0、2、0……2020年」

『貴女の行先は２０２０年です。２０２０年における注意事項を説明します。２０２０年には新型ウイルスが世界的に蔓延（まんえん）しています。しかし貴女方、新人類はこのウイルスに対する免疫（めんえき）を獲得（かくとく）しており、行動の制限を受けることはありません。ただし旧人類には未来から来たことを、気付かれないよう十分に注意をしてください。また、気付かれた場合には即座（そくざ）に修学旅行を中止します。不慮（ふりょ）の事故等で命が危険にさらされていると判断した場合も同様です。また、修学旅行期間中に関わった人々の貴女（あなた）に対する記憶（きおく）と、貴女がとった行動による結果は、８月31日午後11時59分59秒に消去されます。ここまでで何か質問があれば』

「ないです」『了解しました。それでは一か月後、同様の時間にここから、２０２０年の旧日本国エリアに貴女を転送します。レンズを外してください』そういうと画面はプツンと切れた。後には、青白い空間が映し出され、そこから透（す）けて教室が見えている。レンズをケースにしまい、続いて後ろの席のロッカーから、白いケースを取り出した。蓋（ふた）を開くとそこには、「現代文」「新古典」「旧化学」などが書かれた同じようなケースがきれいに整列して、納まっている。そこに今日行った授業のレンズを入れて蓋を閉じた。『３０２０年７月１日、15時45分。データを保存、更新（こうしん）します』

『３０２０年８月１日となりました。日本エリア第三学区第一学年、ハル・アカサカをこれより、２０２０年の８月１日旧日本国エリアに転送します。本人確認を行います。完了しました。転送前に、ハル・アカサカの思考回路に、２０２０年の日本における使用言語、文化、慣習、マナー、政治形態、経済状況、一般的な共通認識、そして、我々人工知能に対する知識と認知を、組み込みます。同意であれば、ボタンを押してください』触れるか触れないかのうちに承諾（しょうだく）という文字が表示された。『それでは、今から転送を行います。よい旅を』

人が多いのは予想していた。一番驚いたのは、食べ物の見た目に個性があること。見た目も、肌触りも、舌触りもどれも豊富で、それでいて、ごちゃついている。豊富だが、整っていない。人も、食べ物も、本も、音楽も、文化も思考も豊富だけれど、整っていない。「ねぇあれ食べに行かない?」放課後、駅まで友人と歩いていると、赤色で装飾された、一回り大きな車が何やら食べ物を売っていた。「今日部活きつすぎてほんとにお腹減ってたんだよね。食べよっかなぁ」赤い車の前には、ひざ下ほどの黒いボードがあって、色とりどりのイラストが描かれている。上の、はらいがくるっと巻かれたフォントのカタカナを読む。「クレープ……」「春も食べる?」

クレープ、なんだこれは。和菓子の類ではなさそうだ、洋菓子か。「ねぇ、クレープって何?」聞いたことがない。おそらく2020年の日本でもあまりなじみがない食べ物だろう。私が知らなくても、怪しまれはしな、「えっ、クレープ知らないの!?」「そ、そんなに美味しいの?」「うん。食べたことないならさ、今食べてみようよ! どれにする?」

どれにする? と言われても、多すぎる。このクレープというのは洋菓子なのだろうが、野菜が入っているものもあるし、メニューを見るだけで目が回りそうだ。「迷うなぁ」思考回路に日本語が組み込まれていなければ、完全に何が書いてあるかさっぱりわからない。「私のおすすめは、チョコバナナに生クリームとチョコレートソースをましましにしたやつ」「じゃ、じゃあそれで」「じゃあ私は、イチゴのこれで」どうやら先に支払いを済ませるらしい。驚いたのは種類の豊富さだけではない。「え、今ここで作るの?」「そうだよ、ほんとにクレープ知らないんだね」せ、製造過程を見せる? よほど自信があるのだろうか。3020年は製造ラインは全て管理、制御(せいぎょ)され異物混入などはあり得ないし……そうか、逆に自信がなく指摘してほしいのだろう。

「は、早い」

みるみるクレープが出来上がっていく。この店員は本当に人間か？　２０２０年には既に、人型の接客機械ができていたんじゃないか。「クレープ食べるの初めてなんですか？」「は、はい」「じゃあ、トッピングは超マシマシにしておきますね」「やったじゃん」

よくわからないが、どうやらサービスをしてくれるらしい。「どうぞ」「ありがとうございます」今にも溢れんばかりに、生クリームとチョコレートソースがたっぷりと乗せられ、バナナが詰められたクレープは、出来立て特有の温かさを伝えてくる。「いただきまーす」あぁそうだ、日本人はたしか食事の前後で「いただきます」と「ごちそうさま」という言葉を使うんだ。

「いただきます」

今にもこぼれそうなトッピングを急いで口の中に入れる。自然と大きく口を開けて頬張ることになる。口いっぱいに、生クリームとチョコレートソース、それからバナナの甘さが広がっていろいろな味がごちゃ混ぜになった。「お、おいしい、ごちゃごちゃしてるけど、おいしい」「めっちゃ驚いてんね」夢中になって食べた。あっという間にクレープは、手の中から消えて、口の中に甘さだけが残る。もう一つぐらい欲しかったけれど財布がそれを許してくれなかった。歩道のそばの街路樹からセミの鳴き声が聞こえてくる。「ねぇ、セミってなんで鳴いてるんだと思う？」「オスがメスを呼ぶために鳴いてるんでしょ？」「本当にそうかな。ただ、私たちみたいに『あっちぃ～』って叫んでるだけだったら？」「えぇ、それじゃあメスを呼び込めないじゃん」「そんなことどうでもよくなって、ただ自分が思うことだけ叫んでるかもよ」

駅に着くと、先に電車に乗る友人が、右手に定期を持ちながらこちらを振り向いた。「ねぇ明日さ、私の家に来て映画見ようよ」「いいよ。ＳＦとか近未来系の話がいいかな」２０２０年の人間が、未来に何を考えている

のか。未来をどう見ているのか気になっていた。それに貴重な文化資料をこの目で見られる機会だ。逃すわけにはいかない。「あーでも、コロナだし、あんまり人を誘うのよくないかな」「うーんでもさ、あれって多くの人が長時間密になるのがだめなんでしょ？　何人ぐらい呼ぶの？」私はかからないし、問題はない。あるとすれば貴重な文化資料が見られなくなること。「え、今のところ春ちゃんだけの予定」「じゃあ別に良くない？　お互いマスクしてさ、映画見ようよ」

「おじゃまします」「はーい」時間はあっという間だった。初めて見る映画に、くぎ付けになっていた。ずっと二時間も画面を見るなんて耐えられるのか不安だったけれど、開始数秒でその不安は消え去った。背景、会話、食べ物、音楽、構成、目と耳から入ってくる情報は、二時間では足りないほど、豊富で鮮やかだった。立て続けに二本見た後、友人が立ち上がった。「そろそろ休憩しない？　お菓子と飲み物取ってくるから待ってて」

友人は部屋を出ていった。初めて入った、２０２０年の人間の部屋を見回すと、こぎれいにして整頓されているが、教科書などの勉強道具から始まり、漫画、雑誌、ポスター、ぬいぐるみ、鞄など様々なものが存在していてやはりごちゃごちゃしている。小さい頃、歴史資料館で見た物より、物であふれてるな。部屋の中をゆっくりと見渡していると、友人が戻ってきた。「ちょっとは片付けたんだけどやっぱ散らかってるよね。生活感があるってことで」

セイカツカン。

「どうした？　なんか気になるものでもあった？」「いや、なんでもない」

セイカツカン。それは聞きなれない言葉だったが、組み込まれた思考回路によって、その文字が露わになる。

生活感。

「じゃあ次何見る？」

次に見たのは人類が、新たな星を探すために宇宙に向かう物語だった。話は急展開で、どんどん進んでいくが、先ほどの「生活感」の三文字が頭から離れない。

「まだもう一本見られるけどどうする？」「最後はおすすめの映画みてみたいな」友人は、お気に入りという欄にある一番上の映画を押した。それは、ファミリー映画だった。東京の下町で暮らす、家族の話だった。２０２０年よりももう少し古い年代の時代の話だ。それは「生活感」に溢れていた。２０２０年よりも人で溢れ、産業がどんどん発達し、街が出来上がっていく。それは、少女の知る人類とは一番かけ離れていた姿だった。

そうか、生活感だ。３０２０年には、地球じゃないあの星には、生活感は欠片もない。無駄は削ぎ落とされ、かろうじて文化だけは人の営みとして認められているが、文芸も、絵画も、服飾も、料理ですらそれを生み出す人間の数そのものが減り、自然と衰退している。もし千年後、君が好きな映画も、よく休み時間に読んでいる本も、その部屋に置かれている漫画も、今手にしているお菓子も、全て消えてしまって、極限まで無駄を省いた、真っ白な、いや白色すらない、すごくつまらない生活があるんだと言ったら、どう思うだろうか。

「えーなんか逆に見てみたい」

流れるエンドロールを横目に、万が一の話だけど、といずれ来る未来を飄々と話した。

「想像できないなぁ。逆にそんな世界で何を思うのか気になるよね」「な、何もないんだよ？」「だからだよ。何もない世界をどう感じるんだろうと思って。それに、ないなら創ればいい」創ればって……。「私小説書いたことあってさ」「え、すごいじゃん！」「いやいや、一人で書いて一人で消化しただけだよ」「読みたい！」２０２０年の、作家でない人間が書く文章。それはプロが書いたものよりも、生々しく、色濃く、生活感が滲み

出ているはずだ。「あんたならいっか。誰にも言わないでよ、恥ずかしいから」

「お、おもしろい……。まって！　こ、これすごい面白いよ！」「そう？」「うん、私が今まで読んできた小説の中でトップクラスだよ」「あんた今までどんな小説読んできたのよ」言葉に詰まってしまった。地球は文学も芸術も盛んだが、人類が別の星に移住する際、歴史的名著や貴重とされている資料以外はほとんどが、消えてしまった。今ではそれを嘆く人類もほとんど消えてしまっている。だから、こんなに親しみやすい文章は初めてだった。

「今日は31日、明日から二学期だ」今日は31日。修学旅行最終日となる。修学旅行にはお土産として何かひとつだけ、未来に持ち帰ることができる。いつもと変わらず、友人と二人で駅まで歩く。「あのさ、前に見せてくれた小説、コピーでいいから私にくれない？」何度でも繰り返して読みたい。「あのあと誰にも話してなさそうだしいいけど……明日学校だけど大丈夫？」「それはいいの。私明日、学校来られないから」本当はもう会うこともない。たわいもない話を繰り返しながら、一緒に電車に揺られて友人の家まで向かった。「はい、これ」「ありがとう」玄関前で紙を手渡される。「物好きだねぇ」「本当に面白いんだよ」「じゃあまた、書いてみようかな」「え」「何？　何か問題ある？」ただ、読んでみたかった。千年後も残るような名著をどうか、書いて欲しい。「なにも。楽しみにしてるよ」

「どうだった修学旅行は？」「楽しかったです」「そうか。よかったな」「はい」普段通り授業をして、普段通りランチを受け取りに行く。普段通りの挨拶を交わして、傷一つない、滑らかな箱を手渡される。中に入っているのは、ただ味と栄養が再現された、白い固形物。「落とさないようにお気を付けください」「あ、あの」気付けば

口を開いていた。あのごちゃごちゃした、溢れんばかりの「クレープを食べたいんですけど」「わかりました、明日クレープをお持ちします」「違うの。本当のクレープが食べてみたいんです」「……すみません。よく聞きとることができませんでした。もう一度話していただけますか」はなからわかっている。「いえ、あの」それでも口の中に、じわりと甘さが蘇る。「なんでもないです」

帰ってから気付いたんだ。「もし、何かありましたら」「いえ、大丈夫です」もう、あの時の思考回路は組み込まれてない。君が書いた小説も、一行目から何が何だかさっぱりわからない。これじゃ読めないから、古典の勉強もっとちゃんとしようと思ったんだ。「配達ありがとうございました」でも、君の文章にだけ色がついて見える。君をここに連れてきたら、きっと君の周りが色であふれだす。セミが鳴いている。

あぁ、君をお土産にすればよかった。